昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十七年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二八〇号）

慈光

第二十四巻　第九号

目次

かたみの御文……真実院大瀛……(1)
父のことども……池山寿夫……(3)
池山栄吉先生のこと……中井玄英……(12)
畢竟依……山本晋道……(14)
念仏詩抄……木村無相……(17)
後生の一大事……花田正夫……(20)

かたみの御文

真実院　大瀛

静かにおもん見れば、人間に生を感ずる事は上々の因縁によれり、これ大なるよろこびなり。されども若し仏法に逢わずば、枯木の春にあわざるが如し、よろこびの中のかなしみなり。

たまたま人間に生まれ、ことに仏法にあえる身は、よろこびの中のよろこび何事かこれにしかむ。たまたま仏法に逢うといえども、他宗の教は我等が身の上には、かないがたし、ここに真宗の教は末代の罪ふかき五障三従の女人を本と助けたまわんと誓いたまいし、弥陀の本願をすすめたまえば、ありがたしというも、なおおろかなるものなり。

されば其の本願をたのみて、浄土にまいらんと思うについて、いかように心を持ちてたすかるべきぞなれば、何の様もなく唯我身は、つみぶかきあさましき身ぞとおもいとりて、かかるあさましき身を本とたすけたまう弥陀如来の本願なれば、罪ふかき身ながら御たすけにあずかることよと信じ奉りて、少しもうたがうこころなければ、必ず御たすけにあずかるなり。このおもむきをしかと思い定めてうたがいなきを、たのむとも信ずるともいうなり。

御文章に曰く、かの仁体（じんたい）はやく御影前にひざまずいて、廻心懺悔のこころをおこして、本願の正意に帰入してとあり、又曰く、この故に南無の二字は衆生の弥陀如来に向いたてまつりて、後生たすけたまえともうすこころなるべしとあり。

しかれども弥陀をたのむとて、画像本像にむかいてたのむにもあらず、口にたすけたまえというにもあらず、心のうちに御助け候えと凡夫の念をおこすにもあらず。

南無阿弥陀仏は本願の御呼声なれば、たすけてやるぞと呼びたまえる、その御呼声をきいて、御たすけにあずかることよと信じて、後生の一大事をば弥陀にまかせまいらせて、自力のはからいなきをたのむとはいうなり。

このうえは、よきもあしきも皆前生よりの約束、業因のなすわざとあきらめて、必ず神にいのり仏にいのり、其他日のよしあしをえらび、方角の吉凶をとい、天を拝み、星をまつり、占（うらない）にかかるなど、いまわしき心あるべからず。またさきだてる親兄弟の法事をいとなみたまうとも、さきだてるものへ手向けまいらすこころあらば、これみな自力なり。親兄弟の命日にあたりて法事を営みたまうときは、忌日命日を縁として、仏に報謝のために御供養もうすと思いたまうべし、たとい仏檀の払除をするとも花をたつるとも、香をたくとも、皆報謝とおもうべし。信の上は何事も報謝と思いたまうべし。

我身だに仏にならば自由自在に済度なるべし、人のためとおぼしめさずとも、まず我身の信心さだまりぬるや、いなやと思召して、自身の安心決定あるべきなり。

いよいよ往生うたがいなくおぼし召すうえは、報謝の称名おこたりなく御たしなみ肝要なり。この上は御本山の掟、御公儀の御法度にそむかぬようにこころがけて、御身をつつしみ第一にしたまうべきなり。

しかし人によりて身のすぎわいについて偽りをいわねば身のたたぬ人もあるべし、その外、腹もたち、欲もおこるは常のことなれば、止めてもやめられぬことは仕方もなし、往生のためとては、やむるにおよばず、免角あしき心のおこるときは、さてさて浅ましきかな、かかるものも御たすけにあずかる事のありがたやと、かえってこれを御縁とし仏恩をよろこびたまうべきなり。身の行いはあしくとも、心さまはあしくとも、称名はうかばずとも、ありがたくおもうこころはおこらずとも、これでは往生いかがと、うたがうべからず。この者をたすけんとありて、あつく御苦労ましまし本願よと、安堵のおもいに住して御入り候え。

わが安心かくのごとし、これをかたみと思召してあけくれ御覧候え　　あなかしこ

大瀛（だいえい）

母上さま

×　×　×　×　×

（註）この書簡は、広島県生れの和上が、本派本願寺におこった有名な三業惑乱の騒動で流血を見るにいたって、遂に本山で裁きがつかず、徳川幕府の手にゆだねた時、時の幕府もその専門の知識の者が居ないので、わざわざ大和上を江戸に招いて、事態の顚末を聴き、ようやく事はおさまったのであるが、その決裁の結果を見ないうちに、和上は築地別院の末寺の宿舎で、宿痾のため入寂せられた。この書簡はその病中に広島に居られた母上に送られたものである。

明治の末に、菅瀬芳英師の提唱と藤川遊博士や松原致遠師の助力、ならびに西本清人氏の後援によって、別院内に墓を移された。

父のことども（一）

池山寿夫

只今御紹介いただきました、池山栄吉の長男の池山寿夫でございます。ここで花田さんからおききして知りましたが、父の生誕百年にあたりますそうで、この一道会館で皆さんにお目にかかり、父のことどもをお話しさせて頂きますことをしみじみありがたく感謝する次第であります。

私も今年七十二歳になりまして、父よりもだいぶ長生きをしたわけであります。どんなによく出来た機械でも七十年も動かせば、どこか悪くなるものであります。今の私はようよう息をしているという状態であります。一昨年急性肺炎にかかりました。それまではほとんど床についたことはなかったのですが、二ケ月ばかりはすっかり床についたままでした。

それが治ってから一時からだの調子はよくなりましたが昨年五月には血圧が高くなり鼻血が時々出るようになりました。お医者さんは、鼻血は少しは出るほうがいいのですよとの話でした。その手当をしておりますうち、ある日、鼻の中の血管が破裂いたしまして、何時間も出血を続けまして失神しました。……気がついてみますと枕元には東京におります子供も座っておりました。お医者さんの言われるように少しぐらいの鼻血はよいでしょうが、何時間も出血が続きました私は、脈搏もとまり、体温もスッカリつめたくなりまして、いわば一度は死んだようなものでした。しかしその危篤状態も輸血等の手当のおかげでなおりまして、その後いい気になって居りましたら、二度目の肺炎にかかりました。

いわば昨年は文字通り、半年は寝て暮す、の生活をいたしました。今日この頃はようよう会社の方に二時間か三時間勤務しておりますが、今でも身体の調子はよくありません。こんなわけで、折角お招きをいただきながら十分なお話は出来ないかと思います。もっとも私はお話を申しあげる気持でまいったのではありません。皆さんにしみじみとお礼が申したかったのです。

さきほどのように病気して病床におります時、父の歳の

ことを考えました。父の歳を過ぎてから父のことを考えるのですから勝手な息子と思われることでありましょう。併しこれは事実なんです。

人間というものは結婚して二人となる、そのうち子供達が出来る。その子供達も成人し独立して自分の道を歩むようになる。そしてまた元の二人にもどる、二人にはじまって二人にもどる。これがいわば結婚生活のフルコースであります。この間に何が欠けてもフルコースとは云えないと思います。さいわいに私達はこのコースを辿って来ました、もっとも二度目の二人差向いの時には、はじめの二人の差向いの時のように綺麗ではありません、皺だらけになっておりますけれども、これはいたしかたがありません。家内とよく冗談を言うのですが、若い歌手がうたってくれるでないか。いいじゃないかしあわせならば、というてくれるのだから、しあわせはいいのだよ、と云う時もあります。

このように考えますと、父はフルコース、それが出来なかったのだなあ！随分淋しかったことであろうと思うのです。三度の病気とも私は、子供達みんな集ってくれて、その後も床を離れるまで、いりかわり誰かが世話をしてくれる。父にはそれがなかったのです。私は病気して妻子に看護をうけるのが何よりも嬉しかったのです。それが父にはなかった、随分つらかったであろう、淋しかったことであろうとしみじみ思うことであります。

私は病気中、父のことをいろいろと考えますと、これまで何ともなかったことがいろいろと思い出されるものであります。けれども皆さんは、池山栄吉の長男であるから、恐らくお父さんからいろんな話をきき、導きをうけていられるでしょうね、とお考えになるかと思いますが、それは歎異抄のお言葉でないが「おおきなるあやまりなり」で、そういうことは私の父には無かったのです。父は別にお説教らしいことをしてくれたことは一度もなく、阿弥陀様はね、と言ってお話を聞かしてくれたこともなかったのです。

父が私共にしてくれたことと云えば「歎異抄を読もうね」と云ってくれました。母が亡くなった後、私を含めて五人の子供に「歎異抄を読もうね」と父に言われると、ハイというて集りましたが、時には、又こまったなあ、遊びに行きたいが、と思ったこともありました。小さい弟も妹もそうであったと思います、が、後で分けて貰えるおいしい好きなお菓子がそこにあるので、それにひかれたのかも知れません。父は歎異抄を読んで、この言葉はね、こんなんだよと云うたことは一度も無かったのでした。唯一緒にそろって歎異抄を読む、そのスピードは四十五分かかりました、それだけのことでした。

おそらく父の気持の中には、信仰と云うものは、歎異抄にもそのお言葉はありますが、説いて聞かせ、授けるものでないのだ。何時か機縁が結ばれた時、御親のおはからいによって、人間の心というものがその大きなるものに結びつくことがある。それを人間がいくらはからってみても出来ないのだ。そういう機会がおとずれた時、それに結びつく機縁をつかむことが大切なんで、父と一緒に歎異抄を読んだなあ！と、それだけの事実が何時かそういうことがあった時に、この子供達の機縁が熟することもあるのでないかと。すべてのことは阿弥陀様のなしたまうところなんだ、という気持があったであろうと思うのです。

この頃、家の子供達は、宗教とか信仰とかの方に向かないで、どうも家庭がうまくいかない。それにつけてお前も時々お仏壇の前におすわりなさい、と言いたくなるとよく聞きます、そういう親のお気持はごもっともなことでありましょう。しかし、それはなかなか、そうやったところで機縁は人間がつくれるものでない、人間が生きていくうちにはいろいろのことがおとずれる、その一つ一つが〃まだわからないかい、まだわからないかい、俺の気持が、俺がいるんだよ〃という御親のこころが含まれている事実は、人生の一人一人におとずれてくる。その時に、パッと把握する、適応しうる、つかまえうる、という人間の気持があるかどうか。その気持にしてやりたい、それがいわゆる

「念仏申すのみぞ末通りたる大慈悲心にて候うべき」

というお言葉、その境地をいうのではないかと思われます。子供を可愛いと思わない親はない。しかし、これをいとおしかわいと思うて、よくしてやろう、世話してやろうと云ったとて、この慈悲始終なし、で、思うが如く、存知のごとくたすけとぐることは出来ないのである。

悲しいかな、人間にはつらいこと、苦しいこともあるであろうが、親の方は早く死ぬのだから、自分の死んだあとにお前達は生きていかねばならない。人生はつらいこともあるのだ、その時にお前達に、つまり大きなお力の阿弥陀様のふところにいだかれて生きていくのだよと、そうなるようにと願う親心、これが「念仏申すのみぞ末通りたる大慈悲心にて候うべき」という境地であろうと思うのであります。

そういうようなことを病気して私は考えたのでした。私は子供達が来てくれ看護してくれる。それが一番嬉しいにつけ、父にはそれがなかったことを気の毒に思い、父に相済まないと思うにつけ、思いを自分の子供のことにつけてそのようなことを考えたわけであります。

父はさきほど申しましたように、特別になんの話もしてくれませんでしたが、唯「歎異抄を読もうね」と言って読んでくれたことが、私の心に一生のささえになっております。

そのようにいろいろ考えてみますと私は生れてからずうと父と一緒に二十何年間おりました。二十八の時に日本をとび出しまして、その後は外国生活を続けておりました。まあ父と離れておったわけでありますが、想い出というものは無限にあるように思いますのですが、忘れがたく心に焼きついているシーン、情景というものはいくつあるのか、十を数えるぐらいしかないものです。その中で心の中に残っておりますものを皆さんの前に今日は聞いていただこうと思う次第であります。その中では、何時か此処かでお話したことがでて来ると思うのですが……。

先ず第一番に、池山栄吉というと、御承知のように歎異抄一本の人であった。今京都の浄住寺には名号碑があり、色々の父の流れを汲む人があり、方々には父を慕うて下さる方々があります、先日も「歎異抄と私」という題でテレビに出まして座談会をいたしました時は、なにも連絡もしなかったのに、方々から、視聴しましたよとお知らせを頂きました。それだけに池山栄吉を結び目としてつながりがある、大きな足跡があるなあと思うて、私はうらやましくなる。私の足跡は何もない、足跡を残した父は幸福だなあと思います。

けれどもそれは学者としての栄吉でもなく、ドイツ語学者としての池山でもなく、或は宗教的学者としての池山栄吉でもなく、所謂信仰者としての池山栄吉で、その信仰書は歎異抄だけでありました。

父は私達と歎異抄を読む時は、仏壇の前に坐ってではなく、座敷の真中に坐って、さあおいでとそこに坐わらされる。真中にはお菓子がある。小さい子供ははじめからそれをじろじろ見ている、それでいいのです、父はそれでいいんだ、坐っていてくれればそれでいいのだと言いたげな姿であった。

また父は一人で仏前に坐って合掌し、自分一人で歎異抄をよく読んでいました、またお念仏しておりました。

父は庭木をいじったり、散歩をすることが好きでした。父と一緒に散歩に出かけると父は首を振り〳〵、ナマンダブ、ナマンダブ、と念仏しておりました、私はそれが恥ずかしく思いました。或時も散歩のお伴をしておりますと、思わぬところで、ナマンダブ、ナマンダブと父はお念仏申す、行き交う人は振りかえる。私は父に、他人が見ているでないかと云いますと、父は、そんな大きな声で念仏しだかね、と笑っているのです。

夏にもなれば、シャツも着ないで素裸のまま縁側に大きな胡座（あぐら）をかいて、ナマンダブ、ナマンダブと長い時間一人でお念仏しておる父でした。

父は青年が好きでした。そのせいか悩みをもった青年がその悩みを聞いてもらいにたずねて来ます。その青年が一応話し終るまで、ナマンダブ、ナマンダブと称えながら青年の言葉をうなづきつつ聞いておりました。そしてその青年に、君、歎異抄を読んでごらん、一回でわからなかったら二回、三回、四回と何度も繰返して読んでごらん、と云って一冊の歎異抄を差し出すのでした。只それだけでした

父は言葉には出しませんでしたが、心の奥には、その歎異抄には、君の悩みをすっかり知っていて下さるお方、君を一番可哀想にと思うて下さるお方は、その本の中にいらつしゃるのだよ。君は、はかない私に同情を求めていらつしゃるのだが、それは末通らない、浅はかなものなんだよと、青年の悩みに同化して、青年が帰って後は、泣かんばかりの表情で可哀想になあ、可哀想になあ、とナマンダブナマンダブと流れるようにお念仏がほとばしっておる父の姿を私は見たのでした。しかしその姿を青年は知らない、父の相手は青年ではなく、阿弥陀様であった、み親なんです。どうかあの子をたのみますという父のねがい、父は君を救ってあげる力はないのだ、どうか歎異抄によってみ親に、と願いつづけ、今申しました、可哀想になあ〳〵と泣かんばかりに、お念仏を申しておる。これが父の姿でした

私は昭和十一年に約一年間、日本に帰って来ました。その時結婚して、又外国に出かけました。父はその時、京都に住んで居りました。私は、もうこの世の別れだと、父の危篤のしらせを受けても、ペルーのことですから帰れないのだと思いました。当時は航空便はありませんので、船で三十何日かかって渡航したものでした。口にはしませんがこれが此の世の最後と思い、口では元気に、お父さん、では行ってまいります、お父さんからだに気をつけてね、と云いますと、父は、元気でね、仲よくね、とすぐ又会うことの出来る子を送るように、元気で淋しい素振りはすこしもせず、私共若い夫婦を送り出してくれました。

私共二人は、これよりほか仕方がないのだ、この頃の流行歌にありますように、この世が駄目ならあの世があるよ、という捨てばちの気持で、あとに残した父のことなど少しも思わず、汽車に乗り、船に乗ったのでした。ところが四、五年前でしたか、京都の一道会にお参りした時、京都の信国淳先生が、その私達の出発の晩、父の家に泊っていて下さったそうでした。その信国先生が、私達出発後の父の動作を、ある日の父の断面として一道会でお話下さい

ました。それによりますと、父は、時計を手にして、おお今汽車は京都を出るかな、今頃は名古屋を出たかな、と病弱で歳をとった父は夜の更けるのを知らず、何時までも〳〵床にも入らず、ひとりごとを云っておったそうです。翌日の船出の時も、翌々日の航海の時もおそらくそうであったと思います。しかしそんな父とは私は夢にも知りませんでした。信国さんが云うて下さったから七十近くになってはじめてわかった父の姿なんです。だから私は父を知ってますというようなことは、おこがましくて云えた義理ではないのです。お互に人の知らないことを沢山もっておる我々ですね。また自分の知らないことで取りまかれている我々です。常に自分のことは自分が一番よく知っていると云いますが、自分のことが自分にわからないということをしみじみ思うた次第であります。

父の生活というものは歎異抄の中にある、又生活の中に歎異抄を読んだ。それで父は思いもかけない時、処で、歎異抄と云いますか、阿弥陀様と申しますか、お念仏が出て来たのでした。

先回もお話申しましたかと思いますが、父の愛犬が犬捕りにつかまった。そのことを隣りの人が知らせて下さった。父は学校へ行かねばならぬと身仕度をして居ったのでしたが、そのまま家を飛び出して見ますと愛犬は首を縛られて引張られて行く。それを見て、とっさに犬を取りもどし助けずばおかぬと決意をしたのでした。

父は早速、犬捕りの所へ行って丁寧にこの犬を放し飼いしたのは私が手落ちでした、つぐないはいたしますからどうかこの犬を返して下さいと云いますと、犬捕りは、この犬は警察へ連れて行って保護しておくからのちほど警察へ行って手続きをして受取ってくれ、と云いました。父は犬が可哀想で〳〵それまで私は待てない、どうしてもこの犬と離れることは出来ない、何処までもついて行きます、と犬と離れないのです。犬捕りの方は困りはてた表情で、あんたのように念仏しながらくっついて来られては仕事の邪魔になる。全くあんたには困った、しょうがないから警察へ行きましょう、と、とうとう警察に行くことになりました。

首をしばられた犬、棒を持った犬捕り、念仏しながらついて行く父、考えて見ますと奇妙な一団の行列であったと思います。警察に着いた父は、今までの出来事をことこまかに言い、私の手落ちは如何ようにでも手続きいたしますからどうかこの犬を返して下さいと、ひたすらお願いするのでした。そのようにして犬は無事に返されたのでした。家に帰ってみますと学校では期末試験の日で、沢山の学生

が待ちぼうけをしていることに気がついた父でした。

その父は、ああ、阿弥陀様の気持の何百万分の一かが今日はわかったような気がするね。あの時この犬はどんなにしても救わずんばという気持になったよ。阿弥陀様はね、私達をみて可哀想にと、どのようにしても救い遂げようとの限りない大きな慈悲、阿弥陀様はどのように御苦労を続けて居て下さることかね、と云いながら、ナマンダブ、〳〵とお念仏をしておる父の姿が今も忘れられません。

父は気むずかしい人だとお考えになる方もありましょうが、あかるい半面も多分にありました。落語も歌謡曲も芝居も映画もみな好きでした。それが皆お慈悲に結びつくから面白いのですね。面白いと云いますと語弊がありますが、昔、「丘を越えて」という映画がありました。それは九人の子供の母親があって、その九人の子供を苦労に苦労して育てるのです。やがてその子供達は一人前になった。その頃母親は老い耄れて働けない、痩せ衰えたお母さんは子供の家を順順に廻ってくらす。子供達はお母さんを厄介視する。なるべく早く次へ廻す、たらい廻しする。とうとう母親は最後に養老院に入るのです。そこで母親は廊下の雑巾がけをして、曲った背をのばして一息いれておる。その母親に子供をうらむという姿は微塵も見られない。ただ小さな家の中を駈けめぐった子供達の姿が眼に映るのでした。その後外地に行って居った子供が帰国し、その子の世話になるのですが、私の父はその映画をみて、つらかったであろうね、次から次へと廻される、あれが人間の姿でないかね。ああいう姿は母親なら出来るかも知れないが、父親には出来ないよ、と云ったことがありました。

又、父と一緒に見た映画の今一つに、父と娘と二人で住んでいる極めて貧しい家庭があり、その娘が結婚することになった。娘は、お父さん私の結婚の祝は何もいらないがあのデパートで見て来たお人形さん一つを頂戴ね、とたのむ。父はよしよしと約束する。結婚式は迫った、お金はない思案に、思案をした挙句、その人形を一寸借用しようとデパートに夜しのび込むが素人の悲しさ、すぐ夜警に見つかる。逃げる、年寄った父は息せき切って逃げる。その途中何かにつまずき倒れる。運わるく急所をうってその場で息がきれて死ぬ。この人生、この老父の心情を知る者は一人もない。ただ盗みに入ったということになる。

ついでにもう一つ申しましょう。ある優秀な銀行員があった。どうした誤解かその銀行員が人を殺したと新聞に報道される、事実は殺してないのです。しかし新聞に大きく記載されたのでその土地に住めなくなる、家なしとなり、漸く焼栗の行商人となる。二十年も過ぎ三十年も過ぎる。自分は年老いて身体は不自由になる、お金もたまってない

その時、若い頃、子供達と家庭コンサート、音楽会をたのしみよくやった。その音楽会がずうと引き継がれ、あちらこちらと巡廻しているうちに、その老父の住んでいる町に来ることになった。その会員の中に自分の息子の名前ものっておるので、あり銭をはたいて一番奥の立見席の入場券を手に入れて中に入った。息子は立派なバイオリンの演奏者になっておった。

その会が終るや、楽屋にその息子を尋ねた。そっと中をのぞくと父の写真が壁にかけてあり、立派な銀行員の父であったとしるされてあります。楽屋の中をよく見ると息子一人しか居らない。どうしようかと思案しましたが、ドアーをあけて中に入ると子供はどこかの乞食が物ごいに来たと思うて、一枚の大きな銀貨を差し出す。老父は思いがけなく差し出された銀貨一枚を握るなり、父であると名告ることもなし得ず、逃げるようにして公園のベンチに行く。翌朝公園のベンチに一枚の銀貨を堅く握って息が切れた老人が発見された。しかしこの老人の事実を知る人は一人も居なかったのでした。このような刺戟の強い映画を見たことは私は稀れであります。最近の映画で何時までも心にのこるようなものは見られなくなりましたね。

人間の生活というものは、あの人にもこの人にも自分の本当の姿をわかってもらおうと、私を誤解しておられるとなんだかんだと不平不満、悲しみがつきまとうております

自分の本当の姿をわかってもらおうというのだが、そもそもそれは私達の我儘というか、勝手でないでしょうかね

「かねてしろしめす」お方が一人いらっしゃるのです。つらいだろう、苦しいであろう、と云って下さるお方が一人いらっしゃるのです。そこに人間生活というものが、一転化されるのでありますまいか。

結局つまるところは生活の中の信仰、阿弥陀様の前にぬかづいた時だけが阿弥陀様が相手、そんな信仰、生活ではないのです。阿弥陀様は私がどこへ行っても御一緒して下さるお方なんです。どぶの中に落ちて臭い〳〵身体になってるのを、その臭い泥だらけのそのまんまの私を可哀想にと、抱きあげて下さるお方が阿弥陀様なんです。

それを忘れて綺麗になって、そうしたら阿弥陀様にお目にかかりましょうと、仏壇の前に坐った時だけが信仰ではないのです。生活の中に入って下さる阿弥陀様なんです。御親なんです。ここで一寸休ませていただきます。

池山栄吉先生のこと

中井玄英

この間、テレビの宗教の時間で「歎異抄と私」と題する対談を聞いた。出演者の一人は池山栄吉先生の令息寿夫氏であり、他の三人も若い頃池山栄吉先生によって歎異抄のこころに眼を開かせられた方々であって、話は自然と池山先生をめぐって展開していたようである。濃い眉毛に山羊ひげをたくわえられた先生の温顔が大写しされると、四十数年も昔のことであるが、先生の教えをうけた頃のことが思いおこされた。

私は昭和五年に大谷大学の予科に入ったが二年生の時のドイツ語の担任が池山先生であった。当時は中学を終えたばかりで、池山先生がどんな人なのか知るよしもない。温厚で優しい先生で怠けていても叱りつけるようなことは一度もなく、懇切丁寧に教えてくだされた。その頃の大谷大学には今にして思えば立派な先生が揃っていたようで、英語では歌人の万造寺斉、鈴木ビヤトリス夫人、国語では謡曲の能勢朝次、俳人の鈴木三七（野風呂）、漢文では安藤洲一、本田成之、日本史では徳重浅吉などの先生に教わった。勉強への意欲があれば、これらの先生についていくらでも学ぶことが出来たのであろうが、皮肉なことにその頃は学校騒動が頻発して勉強どころではなかったのである。

今の学園紛争とちがって、一部の学生が学校を政治運動の場にすることから起ったのでなく、大谷大学の場合は、本山が教権を以って大学での自由な研究を圧殺しようとして、自分の意にかなった人物を学長として押しつけてきたことに対する反発から生じたのであった。現在の学長公選制なんぞ、当時の宗門大学では思いもよらぬことであった。

幾日もストが続いて授業のない日が多かった。しかし校舎を実力で占拠したり、先生を監禁したりなど、そんな非常識な行動にでることはなく、今の紛争風景と比べると、まことにのんびりしたものであったと言える。そんなある日のこと、大学近くの会館に授業がなくて時間をもてあました学生が沢山集ってきた。本山に対する抗議集会でもなく学生大会でもなかった。そこに姿を見せられたのが池山

先生であって私が教室外で先生のお話を聞いたのは後にも先にもこれが一回きりであった。というのはそれから間もなく退学して高等学校に入ったからである。

先生がその時どんな話をされたのか、今は何も覚えていない。ただ、「親鸞におきてはただ念仏して……」のくだりをもの静かな調子でお話されたこと、沢山の学生が熱心に真剣に聞いていたこと、それだけが四十年の昔と思えないほどに今に鮮明な印象として残っているのが不思議なほどである。若い私の心に歎異抄の言葉がこの時初めて刻印されたのであった。その後、先生の著書「信を行く旅人」などを読んで、右の言葉の味わいを更に深く知るに及んで、又、先生のドイツ語訳の歎異抄を手に入れて語学の勉強をかねてこの書に親しむにおよんで、いよいよ私にとって池山先生と歎異抄との結びつきは解けがたいものになった。

昭和の初めといえば「赤」のレッテルをはられると一生を台なしにもしかねない厳しい時代であるから、学校は一途に勉強するところと思いこんでいた中学でたばかりの若者にとって、学校ストは大きなショックであった。その前年には竜谷大学でも同じような性質の騒動がおこり、十余名の教授がたもとを連ねて辞職するという事件があって、宗門大学は騒動大学かとの印象を与えられた。宗門内では有数の学者と云われている和上が学生に排斥され、本山や教学部長とかが悪者扱いにされるということは、その頃の素朴な私には理解出来なかった。講堂では学生大会が開かれ、盛んに本山や学長を糺弾（きゅうだん）する。哲学科の学生であった岩倉政治氏など、長髪をふり乱してアジ演説に熱中していた。

私が池山先生から歎異抄への手ほどきを与えられた頃は右の様な時代の背景があった。佐々木月樵氏の唱えられた建学の精神を錦の御旗にかかげ、授業をすてて本山に抵抗した学生、その学生は一方では池山先生の歎異抄の話に聴き入っていたのである。予科に入ったばかりの私には、宗門大学が本山とどんな緊張関係に立たされているか、ストがどんな意味をもっているのか、そんなことは分らない。むしろ分りたくないし、騒ぎに巻きこまれたくない気持が強かったので、一年半程で退学してしまったが騒動のおかげでといえばおかしいが、とにかく騒ぎの最中に池山先生のお話を聞く機会を得て、歎異抄に親しむきっかけも与えられたのである。そして歴史のなかに現れた現実の宗団というものの姿と歎異鈔に記しとどめられた親鸞の言葉を通して私の心に強く働きかけてくる本願他力の教えとの間のかかわりあい、純な信仰に生きようとすればするほど、現実との隔離に悲痛せずでおれない苦悩、そういう問題を後年におよんで持つようになったのも池山先生とのほんのひと時の出会いがもたらしたものであった。

（自照誌より）

畢竟依

山一本晋道

けて居て下さいました。かかる尽十方のお光であったればこそ、逃げてまわった私にも、遂に逃げおうせぬ日がやって来ました。たとえ三千世界の外に逃げだすことが出来ても、親様のお光の外には逃げられぬのでありました。

お蔭さまで、全くその光明遍照のお力で、私の宿縁は漸く熟しかけてまいりました。宿縁内に熟して来る頃には、ちゃんと善知識様は外にお待ち受けでありました。近角先生、安勝寺の御老院さま、高原先生、そして梅原先生と、次から次とめぐまれて来た道の先達、御師匠さまのことをおもうとき、この方々は私にとってはただ人ではありませんでした。それは如来のお光の中から生まれ出て、私を導き下さるための如来の御代官でありました。

真心徹到

この方々によって私はねんごろに名号のおいわれを聞かせて頂きました。お光の力を聞かせて頂きました。かくて日月を超ゆる光、私の底知れぬ煩悩の闇にもさまたげられることなきお光は、遂に、私の胸の中に徹到して下さいま

した。

道を求めて、道を得ず、苦しみ悶えて二十七年、遂に私ははじめて心の底からにっこりとほほえませて頂くことが出来ました。そのお慈悲なお光は、まことに、私の苦を抜き楽を与えて下さいました。

つかんでも、つかんでも何かおちつかず、物足りなかった私も、やっとこのときみちたりて、ありがとうございますと掌を合わせました。

人をのろい、世を憤って苦しんで居りました私が、あさましい自分の姿にめざめしめられ、み仏さまのお心を聞かせて頂くことが出来たお蔭で、どうやら、ほほえんで生きさせて貰えるようになりました。

あきらめられぬ愚痴を心に抱いて、ひそかに悩みつづけていた私が、どうやらあかるく一つ一つの過去のことや、現前の出来事を、うなづき、うけとって生きさせて貰う日がやって来ました。

三垢消滅

親鸞聖人はこの御和讃に、御左訓（ひだりがな）を施したまうて、

法喜（くわんぎこうぶつを、ほうきという。これはとんよく、しんに、ぐちのやみを、けさんれうなりみのりをよろこぶなり）

大安慰

慈光はるかにかむらしめ
ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたまう
大安慰を帰命せよ
共鳴りするこころ

これは阿弥陀仏の光明の御徳をたたえたまうた、親鸞聖人の御和讃であります。讃阿弥陀仏偈和讃の第八首目にあります。親鸞聖人の御和讃は、何れも有難いものでありますが、私はその中でもことにこの一首には心を打たれます。曇鸞大師の讃阿弥陀仏偈によってこの和讃をお作り遊ばした時、聖人の魂も、今更のように大師のお心ととけ合うて、慈光に値い奉ったうれしさに打ちふるえて居られたのであります。この一首をしずかにいただくとき、私の魂もまた何とも云えぬ感激におののきます。

慈光はるかに
み仏さまの御慈悲な光はまことにはるかに〳〵照らし続

と御註釈して下さってあります。まことに、み仏は歓喜光仏にてまします。そのみ光に触れるものを、貪欲・瞋恚・愚痴の闇を消して頂くことであります。みのりを喜ぶこの心こそ、三垢を消滅して、喜・悟・信の三忍（三つのさとり）を頂いた姿であります。

大安慰

又、大安慰には、

（だいあんいは、みだのみななり。いつさいしゆじようのよろずのなげき、うれえ、わるきことをみなうしなって、やすく、やすからしむ）

と御左訓をほどこして居られます。

まことに、阿弥陀仏は大安慰にてまします。私もこの慈光はるかにお照らし頂き、遂に真心徹到して、一念歓喜のときいたりてより、はじめて心の底から安らかに慰められる日が参りました。

もとより煩悩具足の身、この世は火宅無常の世界、次から次と衆禍の波は押しよせますけれど、それら一切の歎きも、憂いも、悪業も、一度大悲の願船に乗じ光明の広海に浮かびてよりは、悉く転ぜられる日がやって来ました。

心を弘誓の仏地に樹てさせて頂いたからです。情を難思の法海に流すことが出来るようになったからです、ここに初めて、私は生きていることの嬉しさを知り、人生の出来

事の一切につけて、尊き意味を味わうことが出来るようになりました。

これからはじめて私にとって生き甲斐ある人生がひらけてきました。お光の中に生れ出ることが出来たからであります。迷いの世界にありながら、そのまんまで次の世で迷いへ帰らせぬお力が私の内に宿って下さったのでありました。

こんなうれしいことはありませぬ。

こんなちからづよいことはありませぬ。

どうか、どなたも、一日も早く、この幸せの中に生まれ出て、同一念仏の兄弟になっていただきたいと願わずには居られませぬ。

（昭和十四年十月二十一日）

歌集

白色白光

久保田明聖

昭和三十九年

帰り待つ者なけれども故郷を忘るる日なく過ぎし三十余年

蛇口より滴る水音無気味にも夜の厨の静寂にひびく

悟り得し如くふるまひし心痛めばたちまちくずれて迷う

昭和四十年

向日葵の大輪すでに実となりて自ら負はねばならぬ重圧

救はるる事を信じて安らけし死ぬも生くるもみ仏の慈悲

羽織裏にて縫ひくれし足袋今も尚宝の如く箱底にあり

亡き母の手縫ひの足袋のなつかしく足に合はねど捨て惜しみをり

病まざればかくまで人のみ情けを知らず過ぎけむナムアムダブ

昭和四十二年

運命と云ひ天命と云ひ人の死を安く云ひつつわが死を知らず

昭和四十三年

寝る前に脱ぎし義足に礼したる事なくすぎぬ長き年月

命ありて覚めし朝を雀らの声さわやかに窓の陽にあり

業因の深きが故に救はると聖親鸞の説き給ふを信ず

再会の機会はなけむさりげなく別れをつげて去りゆく妹

除草液かかりて伸びの衰ひし韮を労はる老は愚痴つつ

病みつつも六十八年よくぞ生くわれより若く父母逝きぬ

足病みて籠る日すでに二十日にて空翔けり舞ふ鳩を羨しむ

昭和四十四年

わがままも許され生くる病床に老の淋しさ念仏唱ふ

たまたまのスイトンうまし故郷のダンゴ汁なり母の味なり

強引に住みつきし猫孕りていよいよ人を恋ふかなしさよ

可愛がらるる事なき猫の孕りてかなしき瞳向けてまつはる

登りつめて宙にさまよふ蔦の蔓仰ぎて立てり解脱なきまま

昭和四十五年

常弱く長寿叶はずと思ひしに七十歳の誕生日を迎ふ

書に顔をすれすれに寄せて読むわれにかかはりのなし照る日曇る日

後記

私は明治三十三年新潟県に生れ、昭和五年発病して全生病院に入り今日にいたった。何回となく重病で死線を越えて七十の峠にさしかかった。「息のあるうちに君の歌集を出したらどうか」と柳瀬留治先生からお便りを頂き今回先生の温情に甘えて本集を出して頂いた。歌集名の「白色白光」は小経から貰った……。

昭和四十六年五月二十日。　北多摩、全生病院にて

発行所　東京都渋谷区代々木五の一の七、短歌草原社

定価、五〇〇円、　送料八〇円也

念仏詩抄

木村無相

一りん

咲いて一りん
あさがお
一りん

言うこと絶えて

思うこと
言うこと絶えて
ナムアミダ
ナムアミダ仏
ナムアミダ仏

ひとすじの道

ひとすじの道
涅槃にとおる
ひとすじの道
涅槃にとおる

ひとすじの道

ナムアミダ仏

秋の蝶

おんひら
おんひら
西へ吹かれて
秋の蝶

おこころ

おこころ
おこころ
おこころ
おこころ

となえ
あらわれ
よびかけたもう

おこころ

おこころ
おこころ
おこころ

本音を

本音を吐け
本音を吐け
本音を吐け
じぶん自身の
本音を吐け

本音を吐いて
本音を吐いて
本音を吐いて
じぶん自身の
本音を生きろ

少年よ

朝の街（まち）
白い杖ついて
メクラの少年

少年よ

大行とは

〝大行とは
無碍光如来の
み名を
称するなり〟

ああ
無碍光如来の
み名を
無碍光如来の
み名を

称するなり

「に」と「を」

聞くんだよ
聞くんだよ
ナムアミダブツに
聞くんだよ

聞くんだよ
聞くんだよ
ナムアミダブツを
聞くんだよ

弥陀の願船

歎異抄第十五章
〃いかにいわんや
戒行慧解ともに
なしといえども
弥陀の願船に
乗じて
生死の苦海を
わたり〃

弥陀の願船に
乗じて
弥陀の願船に
乗じて
ナムアミダブツに
乗じて
ナムアミダブツに
乗じて——

つつむ

わたしを
つつむ
ナムアミダブツ

天地を
つつむ
ナムアミダブツ

今

みんな
死ぬから
よいのでしょう

諸行無常と
いうことは
わたしに
生の尊さを
しみじみしらして
くれるのです

死の上の生
ああ
今——

「後生の一大事」

花田正夫

ある人のおたずねに、
「御文には一大事の後生ということをよく云われてありますが、どうもあそこを読むと自信がないので声が低くなります。どう味わったらよろしいでしょうか」
とのことであった。
この事を縁として私自身に与えられた一つの考案として述べたいと思います。
このお方が、そこを読むのに声が小さくなると仰言るのは、科学的思考が多く支配する現代では、死はローソクの火の消えたようなもので、なくなってしまうというように無の見がほとんどで、これに反して、死後はこうだああだと幽霊のようなものにとりつかれている有の見の人も多少ありますが、所謂現代の知識人としてはそうした有の見は迷信であるときめて受けとれないのであります。
いろはうたにあります「有為の奥山」に彷徨して、そこから出られないので、どちらかと云えば無の見にかたより勝ちであり、蓮師の教えが身につかないのであります。私自身も、旧制中学三年の時、春に兄を亡くし、秋に姉を亡くし、今度は自分も死ぬるのだと、死の闇が大きく私の行く手を塞ぎました。それから師友にたずねても答えてくれませんので、六高に入りますとそのことに集中して愚考し続けました、仏教は地獄と浄土をとき、キリスト教は煉獄と天国、神道は、高天原と冥界をときます。死後の世界が色々と示されていますが、私にはあるのか、無いのか、が問題でありますので、そうした教えは信じられませんでこまっておりました。
そこで、或冬の休暇に、人間は腹一杯に食べて、ぬくい布団に寝て贅沢な考えをしているから、飢えと寒さの極限に立った時、本音を吐くであろうと考え、食物も持たずに山奥へ入りました。そして手に聖書一冊を持っておりましたが、三日目に風邪にかかり高熱を出し、家に帰りました。やりましたことは子供だましのようなことでありますが、その中で、明日の天候もわからず、襖一枚向うに何があるかもわからぬ身で、死後にどうなるというような大問

題がわかるはずはないと、自分の能力の限界が知れはじめました。

然し、私は当時、医学を志していましたので、自然科学的な思考に傾いてしまいました、死んだらそれきり、という無の見におち入りかかりました。この私の眼を括目させてくれましたのは、岡山医大に入学の許可をうけた四月一日に父が亡くなりましたことです。当時の私の常識から云えば、父は死んで亡くなってしまったと思うのですが、それで割り切れぬもの、何処か遠くに旅立ったとしか思えないのです。これは父に対する私の愛惜の情がそうさせるのでありますが、そこで考一考しましたことは、真実というものは智的にうなづくばかりでなく情意の上からも自然に納得出来るものでなければ、人間全体を無理なしに支え動かすことは出来ない。私が智的に偏執して、万事こと足れりと思っていたことの浅薄さをきびしく知らされました。

爾来、孔子の「知らざるを知らずとなす」ということも「生の従来するところを知らず、いずくんぞ死を知らんや」という言葉も、うなづけるようになりました。そうこうしておりますうちに、かねて導きをうけておりました「歎異抄」をとおして、親鸞聖人に崇敬と信頼を持つようになりました。その聖人が「往生浄土」の道を身をもって説かれてあることも知り、自分には今はうなづけないけれども、聖人が架空のことを仰言るはずがない、聖人の信境が自分にひらけ、信心の智恵をたまわると、智情意の三つの上に成程とうなづけるに相違ないとわかり、そういう浄土の境界もやがてわかることと抵抗なしに読めるようになりました。これは後年に実際に体得させて頂けるようになり、間違いのないことでありました。正像末和讃に、

智慧の念仏うることは法蔵願力のなせるなり
信心の智慧なかりせばいかでか涅槃をさとらまし

と聖人も讃仰していられます。信心の智慧、即ち仏智見に照らされてはじめて知らされる境界を、凡夫の相対差別の智慧、衆生有碍の智慧をもって知ろうとしたことは身の程知らぬ、邪見と憍慢と我執を根とする迷いでありました

次に、蓮如上人の仰言る後生の一大事とは、現代の言葉で言えば、「生のよるべ、死の帰するところ」であり「生死出ずべき道」であります。

経に「如来は一大事因縁のために世に出興し給う」とあります。私共凡夫の一大事と思うことと、如来の御目に一大事と見てとって下さることとは非常な相違があります。親は子にとって大事なことのために辛労しますように、一切の衆生を一子の如くみそなわす仏陀の心眼に一大事と見抜き、「大悲を西方に垂れて驚いて火宅に入る」の火と燃

える大慈心があらわれて下さるのであります。

その一大事とは、仏陀の心に「一切衆生は悉く仏性を有す」と見て下さるのであり、同時にまた、その衆生はそれを知らず、聞信してもそれを悟りあらわす力もなく、常に煩悩の重雲にとじこめられて、無明の大夜にあって、はてしのない生死の苦海を流転し続け、罪業の重みに沈みきって浮ぶ瀬のない現実相を見抜かれて、狂乱の所為の多いまでの悲心をそそいで下さるのであります。

親鸞聖人は生涯かけて、仏光照護の下にあって、地獄一定の身である、それも智目、行足を欠く者の当然の果で、のがれようのない身であると明確に自己を告白していられます。私はことに聖人の「愚禿の心は外は賢にして内は愚なり」との愚の極限、またかつて一善もなく、悪をなすことしか知らぬ身なのにそれを慚愧する心もない身であると仰言って悪の極限を、わがこととして仰言るのであります。

私は聖者のソクラテスの語を読むと「われは何事も知らざることを知れり」とありますが、矢張り智者だからそれがわかるのだなあ、私には出来ませんとうなだれるばかりであります。又、聖書の「悔い改めを」聞くにつけ、本当の悔い改めなどは不可能でありますと、落伍してしまいます。こうした私にも「外賢内愚」「無慚無愧」の親鸞である、との仰せにはおのずから「聖人様、私も仰言る通りです」と、スリバチの底のように、そこに無理なしに落ちつかせて頂くのであります。そして、仏かねてしろしめす、凡夫われの極限に帰らされますと共に、そこには一切の救いの手がとどかず、すべて無力化する大暗黒の底に、弥陀仏の本願ばかりが今一人の私となってたのもしいすくいの御手をさしのべて下さるのであります。これあって、愚悪の身も、生のよるべを頂けるのであります。

次に「死の帰するところ」について申しましょう。私は今年六十八でありますが、老人病を二つも持っておりましてそうした身も、「ヒビの入った茶碗も大切にすれば長持ちする」と医師から励まされて今日をすごしておりますが、ことに膀胱腫瘍について、色々の人から、あれがよい、こうして治ったと、ご親切でありますが、療法を勧められるので、ありがたいことと思いますが、それの採否は主治医の方の判断にまかせてやらせて貰っております。併し、時々、所謂、病気治しの宗教などもすすめられることもありますが、私はいつもそうした人々にお答えしますことは、「この病になって数年、皆様のご親切から色々と治る話を勧めて下さるので、その事は食傷しました。それよりも治らぬものの救いの道が聞きたいのであります。と云いますと、みんな、黙って帰って行かれます。私とて全快

したい長生きしたいのは山々でありますが、必ず死なねばなりません、死に直面すると真暗闇の闇であります。しかも親類縁者も、医師も薬も何の役に立ちません、独生、独死、独去、独来、の一人ぼっちで、自分自身もまた頼みになりません、天も地も崩れ、自分の持ち合せの智識も財産も経験も一切が無力化する時、譬えて言えば「暴風雨の夜、艪も櫂（かい）も失った小舟で沖で漂流している。磯辺では多くの人々が提灯かざしてオーイ〳〵と呼びかけて下さる、けれどそれはありがたいことではあるが、孤舟に一人、荒浪にただよう身には何の力にもならない、やがて大きな波一つで沈没し死滅せねばならない」と云う場面を想像して下さい。それが自分の姿となった時、この身をかねてしろしめし、名残り惜しく思えども力なくしておわる身を、ことに憐れみ給うお方が、お念仏となって私の内からあらわれて下さるとは、何というたのもしさでありましょうか。しかもそのお方の働きで一番いやな、淋しい死をも「死もまた我なり」と受け取らして頂いて、業報に随順し、そのまんまそこを超越させて頂いて、真実のさとりの世界、報土に往生し成仏させて下さるのであります。妙好人の浅原才市翁のうた

才市いくつになった
六十七になったよ
人生の日の暮れは
あの世への夜明けなり
御恩うれしや
南無阿弥陀仏

とは、信眼にひらける、新生の歩みの一駒であります。思えば何という不可思議でありましょうか、歎異抄十五条に

「おおよそ今生においては煩悩悪障を断ぜんこときわめてありがたきあいだ、真言、法華を行ずる浄侶なおもて順次生（次の世、来世）のさとりをいのる。いかにいわんや、戒行、慧解（えげ）ともに無しといえども、弥陀の願船に乗じて生死の苦海を渡り、報土の岸につきぬるものならば、煩悩の黒雲はやく晴れ、法性の覚月すみやかにあらわれて尽十方無碍の光明に一味にして一切の生を利益せんときにこそさとりにては候え云々」

と、往生成仏の旅姿を如実に、ありありと見えるように説かれています。ここに唯に死の帰するというだけでなく仏としての新生がはじまるのであります。

四国の庄松同行も、旅先きで発病し、同行方の力添えで我が家に連れもどされた時、

「どうだ、これでらくらくしたであろう」

と云うと、庄松はすかさず

「おらは、何処に居っても浄土の次の間だ」

とこたえております。死に場所や、死に様に用事のない大安心の信境、良寛様の

わたしにし身にしありせば今よりは、かにもかくにも弥陀のまにまに

であり、また

我ながら嬉しくもあるか弥陀仏のいますみ国に行くと思へば

の自然法爾の信境であります。かかる無碍の白道を、泥凡夫の私共にたどらせて下さるところに「後生の一大事」が存するのであります。

（昭和四十七年八月十日）

ともしび

聚墨生

「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」

（末灯鈔六通）

源信僧都は「余が如き頑魯（がんろ）の者」といわれ、法然上人は「愚痴の法然房、十悪の法然房」と名告られ、親鸞聖人もまた「愚禿（ぐとく）親鸞」と仰言っていることに、おどろかされ、深くかえりみさせられる。

私共は、賢人智者をいつも願っていて、記憶力のよいものは、学者、智識人と尊敬せられ、愚者はさげすまれるのが世の常であると知らされる。その有様をたとえて見ると闇夜には提灯や油灯や電灯がそれぞれに明暗を競い争うているにひとしい。しかし一度、太陽があらわれると、一切の灯火がみなその光力を奪われて、同じ明るさになり、競い争うたことを恥じるであろう。

私共の煩悩に覆われた無明の身も、仏智の大心光の照護をこうむる時、智慧ありと誇る心も、愚鈍をかこつ心も消滅せられて、光明界裡に浮かび、それぞれの分に安んじて自分の持ち味を存分に発揮させていただく道がひらける。

良寛師は

おろかなる身こそなかなか嬉しけれ　弥陀のちかいにありとおもえば

と、よろこばれ、大愚良寛とも名告られている。また或御講師は

このみのり聞きうることのかたきかな、われ賢しとおもうばかりに

と、すこしでも学問あり、智慧ありとうぬぼれている者へきびしい警告をして下さっている。

（四十七年四月二十三日。）

あとがき

彼岸月に入り、みのりの秋となりました。草木に負けず泓共も心のみのりを迎えたいものであります。

先日テレビの対談で、文芸評論家の中村光夫氏が「フランスなどでは、使用人が過ちをしても決して自分が悪いと言わない。日本では自分が悪かったとあやまればそれで事済みになるが、異民族との交流する国々では、悪いと云えばその償いをしなければならないから、極力いいわけをする」というようなことを話されましたが、考えさせられますことです。

日本ではむしろ許されるという甘い予測の上から、自分が悪かった、という場合が多いので、悪いと知って何故こんなことをした、と責められると、悪いといっているのにそうまで言わんでもよいではないか、とひらきなおる、結局、洋の東西を問わず、自分が真に悪いということは、身びいきの心の強く、うぬぼれのやまぬ身には、素直に認めることが出来ないのが通常のようです。

蓮如上人が「誰のともがらもわれは悪しと思う人一人としてあるべからず云々」と言われたことも、親鸞聖人が「無慚無愧のこの身にて云々」と仰言ったことも、時代の流れでは消すことの出来ぬ人間の実態をわが身にかけて教えられますことです。

さて病人であっても自分の病気に気づかぬ間は、医師も医薬も求めませんように、われはわろし、ということを知る力のない者には、最後まで無慚無愧で不平と不満の苦悩の生涯を終らねばなりません。聖人はこうした無窮流転の泓共に同座して下さって、「他力の悲願はかかる身をかねてしろし召されてあらわれて下さるのだから、かくの如きの我等がためなりけりとしられて、いよいよたのもしく覚ゆるなり」と信証して下さるのであります。

この聖人の御述懐にふれて、はじめて「聖人様、泓もその通り無慚無愧であります」と知らされるのであります。

何人もの若い婦女子を殺害した大久保清が「早く死刑にしてくれ、俺は地獄行きだ」捨て鉢なことをいって、罪状の自白をしなかった時、両親が面会に行ったが、涙で物が云えなかった。清はこれに対し、自分のそだちが悪い、社会が悪いと言いわけばかりをしましたが、三十分の面会時間が終って別れの時「清、お前がどんな悪いことをした人間であろうとも、わしは見捨てはしないぞ！」と父親が云った時、さすがの清も涙にむせんだのでした。その後数日にして、罪の全体を告白したとありました。

断崖でおちかかる時、我々はおちまい〳〵と何でも彼でもしがみついて、谷の深さなど見るゆとりもなく、おそろしさで一杯でありますが、そこに丈夫な手に抱きとめられる時、はじめて安心して谷底をかえりみ、その深さにおののくのであります。我等の実態を大智をもって知り尽くされそのすみずみまで満ちわたる大悲の仏心がとどけられて、自分の無慚無愧な姿と、外賢内愚な愚かさも、うなづかれるものであります。ここに、聞くべきは本願の生起本末であり、接すべきは本願をいただかれたよきひとであります。

御案内

毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会

毎月二十四日午前、午后、教西寺法話会

定価　半年　四〇〇円（送共）
　　一年　八〇〇円（送共）

編集・発行人　花田正夫
　　名古屋市南区駈上町二ノ八八
　　電話八二一局七〇三七番

印刷人　吉野穂志郎
　　愛知県西加茂郡三好町大字福谷

発行所　慈光社
　　名古屋市南区駈上町二ノ八八
　　振替口座名古屋一〇四七〇番
　　郵便番号四五七

慈光　第二十四巻　第九号　昭和四十七年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可